様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19402009
研究課題名（和文）　カンボジア前近代における都市ネットワークと国家形成過程

研究課題名（英文）　Urban Network and State Formation Process in Pre-Modern Cambodia

研究代表者
野口博史（NOGUCHI HIROSHI）
南山大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：10351074

研究成果の概要（和文）： プレアンコール期碑文出土報告地点の約 70%を踏査し、これに基づいて土器・陶磁器の分布と変遷・レンガ中モミガラ約 50 件の実測と解析・寺院建築実測十数件が行われた。これらの関連から、カンボジア南部と北部では、境界は必ずしも明確ではないものの、モミガラ形態分布・土器・陶磁器の分布に相違が見られること、これらには時期的な連続性がある程度確認できることが明らかになり、碑文学的に指摘された国家形成における地域的な重点の相違と歴史的連続性が示唆された。

研究成果の概要（英文）： We confirmed around 70% of reported point of pre-Angkor inscriptions, and according to these field survey, we analyzed collected artifacts. We also conducted measure of rice remains in around 50 fragments of bricks of pre-Angkor to early Angkor temples, and mapping of more than 10 temples. According our analysis, to compare north and southern Cambodia, distribution of varieties of rice, pottery is different. However, we can not draw clear demarcation line between north and south. Then, we may say these sites are historically continuous. These results support past studies of epigraphy, especially continue of kingship history in pre-Angkor and Angkor period, and deference of importance between area in Cambodia.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 2,500,000 | 750,000 | 3,250,000 |
| 2008 年度 | 2,300,000 | 690,000 | 2,990,000 |
| 2009 年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 6,100,000 | 1,830,000 | 7,930,000 |

研究分野：複合領域
科研費の分科・細目：地域研究
キーワード：カンボジア史・都市ネットワーク・国家形成過程

１．研究開始当初の背景

本研究はマイケル・ヴィカリー（Michael Vickery）ら、近年のカンボジアにおける碑文学的研究と考古学者らによる実地調査を元として、カンボジアにおける広域調査によって碑文と考古遺跡の地理的分布に着目して相互の関連を検討することであった。

２．研究の目的

上記の背景から、碑文出土報告地点の確認・付随する遺跡から出土する土器・陶磁器・及びレンガ中モミガラ・寺院建築の５側面からカンボジアにおける都市ネットワークの存在とその変化を確認し、これをもととして国家形成過程の解明を試みることが目的であった。

３．研究の方法

年２回、各々２週間程度のカンボジア広域に及ぶ実地調査によって、上記５点を可能な限り網羅的な遺物及び情報を入手し、これを解析することによって相互の関連を明らかにする。

４．研究成果

（１）プレアンコール期碑文出土報告地点の約 70%を踏査し、これに基づいて土器・陶磁器の分布と変遷・レンガ中モミガラ約 50 件の実測と解析・寺院建築実測十数件を行った。

実施日程、実施場所、主要な成果は次のとおりである。

①2007 年８月から 2010 年３月にかけて、計５回、各２週間程度の実地調査が行われ、本研究課題に関連の深い地域の広域調査が実施された。

2007 年８月にはベトナム･アンザン省及びカンボジア西部コムポンスプー州の広域調査が行われ、アンザン省においては未報告碑文１件・コーンピセイ郡において同１件、そして周囲４km 程度・高さ・幅共約 2m 程度の土塁遺構が発見され、これに含まれる土器から、建造がプレアンコール期に遡ることが推測された。

また、同郡においてはスラン山系の東端に位置するターモック山が黒色片岩と砂岩の地質を持ち、山中腹の寺院周辺の調査から、プレアンコール期からアンコール期にかけて、この山が寺院開口部材の切り出し場であることが推測された。

2008 年３月には、このコーンピセイ郡周辺において航空写真で確認された一辺 500m程度の矩形土塁遺構の調査・前述の土塁遺構の再調査を行い、土器片等の遺物を採集し、またターモック山の片岩・砂岩サンプルの帯磁率を測定した。

同月にはコムポントーム州において広域調査を実施し、プレアンコール期主要碑文出土地点７点を調査し、このうち２点において碑文の現在が確認された。

また、プレアンコール期寺院遺跡３件の実測及び周辺地形観察・遺物収集を行い、８世紀におけるいわゆるコムポンプレア様式の寺院及び８世紀の碑文がトンレサープ及びこれに流入する小河川氾濫原に主たる分布が見られることが示唆された。

2008 年８月にはカンボジア南部コムポート州・ターカエウ州・コムポントーム州・コムポンチナン州において広域調査が実施された。コムポート州とターカエウ州においては主要遺跡部材の帯磁率が測定され、片岩においてはその産地において帯磁率分布が殆ど同一である一方、砂岩においてはこれが産地によって相違することが確認された。

コムポントーム州においては、土器・陶磁器片の採集・港市跡の確認を目的として広域調査が行われ、トンレサープ氾濫原沿いに３件を発見した。

このうち２件は正確な年代は不詳であるが、前近代において建設された幅約 10m 程度の道路によって結ばれており、トンレサープ北岸における水路による交通路と陸路による交通路の交差の様態が明らかになった。興味深いことに、この道路は通説においては 12 世紀にジャヤヴァルマン７世王によって建設された「王道」とされるが、その端は様式より建設年代が８世紀初頭と推測されるプラサートオンダエトを終点としていることである。このことは、プレアンコール寺院が後の年代においても、宗教的にかあるいは地理的にか意味を有し続けていたことを示唆している。

同様の傾向は、同州のプラサートコムボット遺跡においても確認できる。同遺跡はプレアンコール期に建造されたヒンズー寺院であるが、ポストアンコール期において仏教寺院として改築されている。また、サムボープレイクック遺跡群 N11 棟も７世紀に建造され、11 世紀に修築がなされている。

こうした修改築の傾向は、カンボジア他地域においては確認されず、コムポンチャーム州・ターカエウ州においては同一の塚状地形の別の箇所に寺院が増築されるという形態を取る。

2009 年３月においてはコムポントーム州・コムポンチャーム州・コムポンチナン州・バッダムボーン州等で広域調査が実施され、コムポンチナン州においてはコムポンプレア様式の寺院建設がしばしば環濠を欠くこと、またバッダムボーン州においては土器片の集積する塚群の分布・アンコール期の土器を含む道路跡の存在等においてカンボジア中央部の遺跡とは異なった特徴があることが確認された。

一般的に、プレアンコール期からアンコール期初期にかけて、宗教寺院は環濠を伴う塚状の地形に建設されており、これは宗教的空間と生活空間を分割する上で重要な意味を持つと推測される。

この例外として、カンボジア南部コムポート州に５件、またカンボジア各所に散見される洞窟あるいは山頂に築かれた寺院である。これらは接近しにくい立地によって生活空間と宗教空間を区別しているものと考えられ、双方から逸脱するコンポンプレア様式の寺院はかなり例外的である。同様式寺院はその立地から漢籍文献において「水真臘」と指摘される政治権力の所在と推測することもできる。しかしながら、地理的に近接するサムボープレイクック遺跡群は同時代に建造された寺院を持ちながら様式を異にしており、従来まで唱えられてきた８世紀における「真臘」国家の分裂が、碑文学者ヴィカリーの指摘するように存在しないか、あるいは空間的分裂というよりは陸上交通路に依拠した勢力と水上交通路に依拠した勢力の分裂のような形態を想像させられる。

②2007 年・08 年・09 年８月に、これら遺跡から採集されたレンガ片中に含まれるモミガラの実測が 51 件行われた。

これを計量的に分析した結果、以下のことが判明した。

まず、モミ粒から推測される品種は小型・短粒・長粒・大型の４種であり、これは従来までのタイ・ミャンマー等で行われてきた研究のモミ型と一致する。

地理的な傾向として、カンボジア南部の遺跡においてはモミの粒形が大型であり、また多様性が高い。北部においては小型で多様性が低い。これはカンボジア南部がより農業的に豊かな地域であったことを示唆している。

第二に、時代によるモミ型の変遷は明らかではない。また、クラスター分析の結果、これら遺跡の間には明確な境界線を確立することはできなかった。このことは、両者の相違が単なる地理的なものであり、明確な領域を持った政治権力の対立を示すものではない、と評価可能である。

第三に、北部でかつ内陸に位置するサムボープレイクック遺跡は例外的に大型のモミとモミ型の多様性を示し、政治権力による品種選択の特徴も示唆された。

③2007 年８月から 09 年３月にかけて、カンボジア南部コムポート州で発見されたトロペアントナール遺跡の測量が実施され、またコムポントーム州において発見された類似遺跡２件の踏査が行われた。これらは楕円形あるいは円形に加えて副次的に矩形あるいは不定形の土塁、またこれに環濠が付加される場合がある遺構であり、カンボジアのメコン川西岸で７件が発見されている。本研究における調査では、コンポントーム州の２件は、その遺物からプレアンコール期に建設されたものと推測することができ、これはコンダール州スラエオンピル遺跡・プノンペン市のチューンアエク遺跡における調査結果と同一である。トロペアントナール遺跡の遺物も概ねプレアンコール期と推測できるが、オンコーボレイ遺跡の遺物とは相違が見られ、同時期における遺物の多様性を示唆している。これら土塁の形態と意味については研究の現状から慎重な評価が行われるべきであるが、プレアンコール期初期の特徴とする見解か、あるいは通常の石造あるいはレンガ造寺院とは異なった機能を持った遺構である可能性もあるだろう。

④2007 年８月から 09 年８月にかけて、採集された土器の分析が行われ、調査された各遺跡の成立・使用年代が新石器時代からアンコール時代にかけて示唆された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①黒沢　浩・野口　博史、カンボジア先史・古代史の再検討－土器・モミガラ形態からみた歴史性・地域性－、アカデミア人文・社会科学編、査読無、第 85 巻、2007、69～106

〔学会発表〕（計２件）

①Noguchi Hiroshi, “Pre-Modern Earthen Wall Sites in Western Makong Cambodia: Distribution, Shape, and Its Implications,” *Recent Researches on Prehistory in Cambodia: An Update* (National Museum of Cambodia, Ecole Francaise d'Extreme-Orient) (August 2009).

②Noguchi Hiroshi, “Rice Morphology, Area, and History: 5th to 11th Centuries Cambodia” *The 2nd International Workshop: New Perspectives of Prehistory and History in Cambodia* (Royal University of Fine Arts), March, 2008.

〔図書〕（計１件）

① Noguchi Hiroshi, *Area-Historical Research in Cambodia: Reports of 2006 and 2007 Survey*, The Joint Research

Group of Royal University of Fine Arts and Nanzan University Volume 2 （August 2008） iii+62pp.

６．研究組織

(1)研究代表者

野口　博史（NOGUCHI　HIROSHI）
南山大学・総合政策学部・准教授
研究者番号：10351074

(2)研究分担者

黒沢　浩（KUROSAWA HIROSHI）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：50387742